
大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-753-3013

「専門資料論」研究集会に参加して

京都学園大学図書館

大館 和郎

現在、私は和書の目録業務を主に担当しているが、小規模な図書館なのでその他の業務もこなさなければならず、特に資料の選択や参考調査業務にたずさわるときには、専門資料に関する知識の必要性を痛感している。そこですぐに役に立つような知識が得られるものと期待して今回参加したのだが、自分の考えが甘かったことを思い知らされた。研究集会案内を読めば、図書館学の方法論で独自の「専門資料論」の確立を願って開催すると書いてあるように、竹村氏の基調提案は原理的などころから考えてゆこうという方針から出発していた。しかしこれは非常に困難なことである。というのはこのような試みが従来あまり体系だっておこなわれてこなかったらしいからである。なるほど「参考調査資料論」や「郷土資料論」といったものはよくみかけるが、「専門資料論」という題目はあまり聞いたことがない。基調提案は図書館全体の中での「専門資料論」の位置づけ、従来の図書館学教育の中で「専門資料論」がどうとりあつかわれてきたか、研究方法の確立をめざしてどうすればよいかにわたって目くばりのきいた見取図を提供してくれたが、個別的な経験の蓄積と照らし合わせながら進めないと、空虚な抽象論に陥ってしまうのではないか。したがって具体的な事例をとりあげるなかで原理的な考察を加えてゆくという方向で進めていけたらと思う。

次に本題の武者小路氏の講演の内容だが、基調提案がめざすところとうまくかみあっていなかった。つまり基調提案が資料の内容に即した分析を通じて「専門資料論」研究方法の課題の検討と整理をめざしていたのに対して、講演は「もの」としての書物という視点から、従来の書誌学的な研究の延長上に、科学機器の利用によってあらたに得られた成果を話された。これはこれで興味深く紙の透かし模様から、書物の印刷・造本工程を推理したり、インクが退色して消えてしまった行間の書込み文字を解読する話などが印象に残った。また「もの」としての図書館資料の物理的な構造を重視し、資料をできるかぎり傷めないように工夫されている図書館用品をみせていただいた。枕のように中に粒子状のものを布袋につめこんで文鎮としたもの

は、資料への当たりも柔らかく、資料を傷めることもなく、また柔軟性に喜んでいるので、開いた本が斜めに傾いている場合でも、ページを押さえることが可能である。また布製の書見台は本のどの部分に無理がかからず開いておけるようになっており、造本上、十分開かない本や脆くなっている本に適している。

講演後、質疑応答がおこなわれた。その中で参加者の一人が自らの職場をふりかえり、多くの埋もれた資料がその価値も認められず、書庫が手狭なために、このままでは廃棄せざるをえないと語っておられたが、「専門資料論」の確立以前に、専門資料の保存が危ぶまれているという現実にふりもどされた。

以上好き勝手な感想を述べさせてもらいましたが、講師になっていただいた武者小路先生、この研究集会を準備・運営された竹村さんや他の方々、どうもありがとうございました。

<参考文献>

- 武者小路信和「資料の保存と図書館用品」『図書館雑誌』81(4) 1987.4 p.190-192
武者小路信和「PIXE[Particle Induced X-ray Emission](荷電粒子励起X線放射)分析法と書誌学—書誌学研究の一動向」『大東文化大学紀要 社会科学』28 1990 p.259-268

レファレンス・デスクから —京都大学薬学部図書室—

わたしがカウンターで利用者から尋ねられる事柄といえば、『この文献がどこにあるか』ということが主である。『このことについて何で調べればいいのか』という問いが、ほんの時々あるが、実に困ってしまう。薬学の専門家ではないわたしに答えられるはずもないからである。

それで、図書室の職員としては、すくなくとも書誌情報が円滑に流通すべく、このことについてだけは、がんばらねばならない、と思うのである。

だから、文献のreferenceの欄を見せられたら、なんとか原報に行き着けるよう、援助できるように努力する必要がある。

以下、よく使うツールについて、どの点に留意するか、思いつくままに記す。

・ Chemical Abstracts Service Source Index(CASSI)

雑誌論文のreference欄の雑誌名の省略形は、CASSIに準拠して記載される場合が多いので、正確な雑誌名を調べるのに役立つ。排列は、省略形のアルファベットの字順になっているので、その点に留意して引く必要がある。

本書はChemical Abstractsに収録された文献の書誌情報を扱っている。Chemical Abstractsは、単行書も収録対象としているわけで、雑誌に止どまら

ず、単行書の書誌調査にも役立つ。

また、Translation版についての情報もある。利用者がロシア語の雑誌論文を必要とするとき、その雑誌が京都大学になくても、CASSIでTranslation版の情報をチェックすると、そのTranslation版なら京都大学が所蔵している場合もしばしばあった。

・ Current Contents

この目次誌は、速報性に重要さがあるわけで、時が過ぎると役にたたなくなるような感じもするが、この目次誌の『Triannual Cumulative Index』の利用により、書誌調査に大変有用である。

・ 医学洋書総合目録

生物医学系の単行本の所蔵情報を知るにはかかせない。毎年、各年版がでる。学術情報センターの目録システムでの検索ができるので、他の図書館の所蔵情報を比較的容易に知ることができるようになったが、まだ、入力されていなかった年の所蔵情報など、本書のおかげで所蔵情報を正確に把握できる場合は多い。

・ 学術情報センター目録検索

前述のように、これが利用できるおかげで、たいへん便利になった。

ただ、私としては、次の点に留意している。

シリーズものの場合、雑誌で入っている時と、図書で入っている場合がある。だから、片方の検索だけでは片手落ちになるときがある。

また、シリーズもの場合は書誌階層の考え方を理解し、どのような形で目録が入力がなされているかを、検索する場合も理解する必要がある。また、検索用インデックスの作られ方を理解するのも合理的な検索の一步と考える。

出版物理単位が複数の書誌の場合、所蔵情報は詳細表示までみないと、欲しいところをもっているか、どうかはわからない。

話は、かわるが利用者から『"ibid"』という雑誌はどこにありますか』といて尋ねられる場合がたまにある。これは、むしろ論文の記述の仕方にかかわる問題であろうが、このような事項を知らないため、原報にいきつけないようなことにならないために、図書館職員はこのような知識も必要と思った。

参考文献

長澤雅男ほか編『図書館学研究入門 意義と方法』1988 日本図書館協会

図書館学を学び方を「作法」から解説している。"ibid"は、どういうことかも説明している。わたしたちが利用者の立場にたつて資料をみることができるようになる、と思う。

高野史子『医学系新入図書館員の自習方法 特に参考業務について』薬学図書館 vol.35 no.1 (1990)

文献リストのスタイルについても図書館員が助言・援助できる力をもつ必要性を説く。

(京都大学薬学部図書館室 菅修一)

第3回支部委員会記録

日時 1991年1月8日(火) 18時30分～20時30分

場所 京都大学教育学部

出席 篠原, 堤, 竹村, 大館, 橋本, 小林, 松原, 西野

欠席 竹本

議長 竹村

1. 報告

(1) 情勢討議 (2) 大図研大学について—理工学文献案内(12月8—9日, 10名参加) 英書講読(1月12日予定) 科学史(12月22—23日合宿, 8名参加)

2. 協議事項

(1) JLA評議員選挙について (2) 大図研大学「江戸文学資料論」(1月19—20日)について (3) 「年報京都の大学図書館」の編集方針について—調査項目, 調査機関, 調査方法等。

—全国研究集会・おしらせ—

日時・3月9日(土) 15時～
10日(日) 12時
場所・神奈川県立近代文学館
テーマ・1990年代の大学行政
と大学図書館

* 詳しいことは「大学の図書館」2月号で